

説明的文章の指導を見直す

今まではこんな授業をしていた

(1) こんな問題はなかったか

① 「何が書いてあるか」で終わってしまう授業

今までの説明的文章の指導は、段落相互の関係や要点・要旨のまとめに重点が置かれ、「何が書いてあるか」の指導にとどまり、書いてあるものから「何を考え、自分の生活にどのように生かすのか」という指導までは発展させずに終わっていた傾向があります。

② 文章の構成を検討するという視点が忘れられる授業

これまで筆者の論理を丹念にたどらせる授業が多かったのではないのでしょうか。これは文学教材の文章を一語一語吟味しながら読むという読み方を、論理的な文章の読み方に単に移し替えただけのものです。こういう授業では、論理的文章の生命というべき、文章の構成を検討するという視点が忘れられてしまいます。

③ 図表（文図）による授業

これまでの文図の指導の多くは、文章を一読させ、それをいきなり「まとめなさい」という作業に結び付けるものが多かったのではないのでしょうか。生徒は結局、自力で文章と文図との結び付きを考えることになり、キーワードの取り出し方のよくわからない生徒は、できあがった文図を熱心に写し取るだけの作業になっていました。これでは、文章から文図に移行させるときの必須の学習たる「キーワードの取り出し」という活動が停止され、単なる結果の暗記の学習と化してしまいます。

④ 話題に流される授業

例えば、クジラの生態についての説明文を対象にしたとします。クジラについて、いろいろと知ることになりますが、それは、教材文に書かれていることを通してです。クジラの生態については、図鑑をはじめ様々な本によって、教材文に書いていないこともわかるでしょう。学習活動が、教材文から離れて、クジラの生態を知ることによって重点が置かれるようになると、教材文は話題を提供しただけになってしまいます。

(2) 典型的な2つの授業スタイル

① 課題解決型の授業

一読後の感想やメモをもとにいくつかの学習課題を設定し、それを解決するために読むという授業スタイルです。

② 読解技能育成型の授業

「要点」「要約」「要旨」「文章構成」などといった、いわゆる読みの部分的技能の育成に重点を置いたスタイルです。

(3) なぜ説明的文章の学習はつまらないのか

① つまらないのは指導者自身なのでは

小中学校の子どもたちが、そして高校生が「説明文が嫌い」「論説文はわからないしおもしろくない」と言うとき、ほぼ共通して言えることは、指導者自身が説明文や論説文を学ぶ魅力や楽しさを体験的に児童生徒に語ることができないという実態です。単に知識を得ることだけでなく、「楽しく」「知的な興味関心をもって」「感性や生き方に結び付ける」教材として読んでいないという実態です。

これは、従来の国語の学習が文学教材指導に偏ってきたことと表裏一体の関係にあります。国語の授業というと「文学の授業」というイメージが強く、説明文を楽しく、しかも個性的な表現力や思考力につなげるような学習等は少ないのではないのでしょうか。

② 詳細な読解から離れられない

説明文の学習においては、まず筆者の主張や思いの要約などの内容をすべて詳しく読解させなければ、表現の学習等にはいけないという授業観はないのでしょうか。読解が形式的な段落分けや、ときには無意味な文図作成、接続語や指示語等の学習と結び付いている点も問題です。

もちろん、接続語や指示語の学習は、論理的構成や論証の特質を把握する上での大切なポイントであり、段落分けも構成をとらえるための基礎的観点です。しかし、それらの学習活動が、教材の特質を踏まえない形式的な学習など、教材の特質とずれていることがあります。また、表現力の基本学習に展開しない狭さや指導者の答えに合わせる学習で、自分の問題意識等が生かされる場面がない受け身型の授業になってきたことにも問題があります。